
翼と優のお話

あかふくろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼と優のお話

【Nコード】

N76110

【作者名】

あかふくろー

【あらすじ】

女性……それは坂本翼にとって、女神である。彼は、美しい女性を愛しやまず、童貞のくせに生きる理由を女性とイチャイチャすること……とする翼はある出会いをする。

「俺にそっちの趣味はねええええ!!」

作戦開始（前書き）

なんか考えていたより変な話になってしまいました（笑）
文章力が無いのはご愛嬌。
どうか最後まで見てくれると嬉しいです。

作戦開始

下らない話だ…。

実に下らない話だ。

今も俺の視線の先にある壇上。

そこで男。壮年の男。役職、校長。が話をしている。

今は始業式。学校生活が始まることを告げる式…という事だ。

実質は校長と教師の戯れ言を聞く会だ。

季節は春。俺はこの学校に入学した。

だいたい学力が適切だったからここにした。そこまで学力は高くないが、この辺ではトップクラスだろう。

別に大学とかは深く考えてない俺には進学校とかにいく必要はない。

この学校は部活などに力を入れている事で有名だ。

部活に入る気のない俺には関係無いんだけどな。

「…という事でこれから頑張りますよう。」

校長が壇上から降りる。

そろそろこの式も終わりたいだ。

おそらく教頭らしい男がクラスに戻るよう指示をする。

俺はパイプ椅子から立ち上がりみんなの後を追った。

クラスに入ってみると皆よく喋る。

この学校に知り合いがない俺には非常に居づらい雰囲気だ。

席についた俺はすぐに眠る体制に入った。この体制は完璧なのだ。

理由は簡単。

話す人が居ないんじゃないかって眠たいと思われるはずだからだ…たぶん。

この体制なら大丈夫。

きっと大丈夫、大丈夫。

あれ…？なんか寂しくなってきた…なんでだろうか…。

まあ…いい！眠れば良いんだ眠れば！

…って眠れるわけないか。

顔を上げてみる。

周りの奴らは喋っている奴が多い。

だが俺と同じように静かにしている奴もいる…。

彼らも俺も共通点は一緒。

友達がいらない。

高校に入りたてではたぶんよくある光景だろう。本当にたぶん。

まあ…自分から話かけるのもなんか照れるからこのまま辺りを見てみることにしようか。

クラスの中での俺の席の位置は真ん中より徐々下。そんなところ。名前の順かと思っていたら少しアレンジされた席だった。まあどうでも良い。

俺の確認すべきことは一つ。

高校に入った理由も一つ。

こうして生きている理由も一つ。

それは…女だ！

…まあ青少年なら普通な事だよな。
こうして可愛い子を探すのは。

むっ…さっそくなかなか可愛い子が…。

俺に一番生きる理由を与えてくれるのは何より女性だ。女だ。女神
達だ。

美しい女性を見るのは男にとって最高に目の保養だ。
まあ…ガチホモは駄目だろうが…。

高校に入った理由も実際そうだ。
ここはまあまあ頭も良いし。なにより部活が盛んだ。

故に！頭が良く！部活で鍛えられた美貌を持った女子が集まるはず
だぜ！グヒヒ！

…まあ、そんな上手くは行かないだろうが見た感じ本当に可愛い子
は居るものだ。あの辺の女子の溜まりなんかは可愛い。

うん…なかなか良い。さすが高校…。
俺が望んだ生活へと近づいていくぜ！

「あーい…んじゃ座れー。」

む…なんか来た…と思ったらうちのクラスの担任らしい男だ。

髪の毛には少し白髪が混じり、誰もが40代と言っただろう見た目だ。

「…んじゃね、俺は高崎。1年間よろしくな。」

素っ気ない挨拶を終えた高崎はさっそく手持ちのファイルを開いた。
おそらくクラス名簿…出席確認だろう。

はっ！ここが第一印象を決める時か！

これから円滑に女子を狙う為にはここで最高の第一印象を狙わなければ…。

「んじゃ、赤田。」

赤田…と呼ばれた男子は「はい。」と素っ気ない返事。

ここはどうするべきだろうか…。

はい、と行くか…アレンジを加えるべきか…。

いや焦ることなかれ、ゆっくり行くとしよう。

作戦は決定した。

高崎は生徒の名前を呼び続ける。

「坂本。」

きた！ここで俺の爽やかな雰囲気を示すときがきたのだ。

「はい。」

完璧だ…。我ながら完璧な返事だ。

そうして高崎は俺の次の名前を呼ぶ。

「桜井。」その名前を呼んだ。

自己紹介…それは登竜門

「桜井。」その名前を呼んだ。

「桜井。」

そう呼ばれた俺の後ろの奴。

「はい。」彼女はそう返事した。

え…なんで女つて分かるかって？

そんなこと簡単。

声を聞けば分かるに決まってるだろ。

桜井は優しい声をしていた。

まあ…ただ顔は見れない…残念。

まあ後で見るけどさ。

真後ろの奴の顔を拝むのはかなり度胸がいる…。振り返れば必ず顔が合うからだ。

んで顔が合ったらかなり恥ずかしい。

だから振り返らない。

高崎の出席確認の間にクラスを見渡してみたが…クラスの中には美少女が多い。

どうやら俺の予想は当たったみたいだ。

このクラスで俺は覇権を握る…。

女神達とイチヤイチヤして暮らす！

これが今の夢。

っーか生き甲斐か…。

この為にはすべきことが大量にある。
まずは第一印象の確立。続いて話しをする話題を作る。
最終的にはフラグを建設する！

フラグを建てるのは至難の技だろう。だが大丈夫だ…俺には出来る。
夢の為なら何でも出来る！

それが何だろうとして見せるさ…必ずな。

「んじゃ次に自己紹介してもらっわ。」

出席確認を終えた高崎はそう言った。相変わらず素っ気ない。

（自己紹介…だと！？）

まあ、一応ね…反応しておいた。

自己紹介…それは高校デビューを狙った少年達の登竜門。

ある少年は流れに呑まれ…地獄へ堕ち。

またある少年は流れを掴み…天へ飛ぶ。

自己紹介は1年間の立ち位置を決めると言っても過言じゃないだろう。

この自己紹介で第一印象は決まる。

女子も男子も同じ…。

第一印象を好印象にするために、人々は自らの知恵を最大限に使う。
そして自らの行き先を決定するのだ。

「俺は出席番号4番の岩本です！中学校ではバスケット部に入ってます

た！1年間皆さんよろしくお願いします！」

4番岩本。なかなかの手練れ…。

爽やかに見せることに特化している。

はきはきと喋り…そしてバスケ部という爽やか要素をふんだんに使用して来やがった…。これにはさすがに勝てない…。

俺なんか精々、野球をやってたくらいだ…万年ベンチだったけど。今のご時世なら野球よりバスケのほうがモテるはずだ。

「自分…天才ですから。」とか言えば人気出るはずだ。たぶん…。

その後も自己紹介は続いた。

爆死する奴は居なかったが…地味な印象を与える奴が結構多かった。

これは男子でトップクラスに入る確率を上げてくれる。ありがたい。非常にありがたい…。

「んじゃ坂本。」

来たか…ついに俺の出番が。

俺のショウの始まりを告げる一言が高崎の口から出た。

（決めて見せる…絶対…。）

「はい！」

出来るだけ明るく返事をする。

そして立ち上がる。

なんか緊張してきたが気のせいだ。

気のせいだ。気のせいだ。

そのまま黒板の前に立つ。
真っ直ぐ前を見据える。

（大丈夫。俺なら…出来る！）

自己紹介…それは登竜門？

（大丈夫。俺なら…出来る！）心の中でそう念じる。大丈夫だ。緊張するな緊張したら負けだ。クラスを見渡す。みんな俺を見ている。

（緊張シテキチャツタヨ。）

ガタガタと足が震えそうだ。人前に立つのはやっぱり苦手だ。すっごい苦手だ…苦手だ。

だが…ここで負けられはしない…。夢の為だ…必ず勝利を掴む。

（行くぞ！おめえら！俺の話を聞けえ！）

「えーっと…出席番組14番の坂本です。中学校では野球をしてました。高校では野球をする気は無いですけど、野球とかスポーツが大好きです。1年間よろしくお願いしまーす。」

パチパチ。

拍手。

やったよな？完璧だったよな？爽やかスポーツ青年って印象与えられたよな？うん…大丈夫。拍手の大きさから普通だったみたいだ。大丈夫…爆死は逃れた。

（き、緊張したあ…。）

今も心臓が爆発しそうだ。

第一印象がどうか以前に人前で話す時に緊張しないようにしよう…。

そうして俺は席へと戻る。

やり遂げた嬉しさで前がよくわからない…だがどうにか席につく。

（やったよ…父さん…母さん…俺…やったよ…やり遂げたよ。）

ドサツ…と机にうつ伏せになる。後の人を確認すべきだが今はどうでもいい。

自分がやり遂げた事に感動している。

「え、えーと…しゅ、出席番号15番の…さ、桜井優です！い、1年間よろしく願いしますっ！」

ん？ああ…後ろの席の桜井さんか…。

（って緊張しすぎだろ…）

少し笑ってしまった。

カミカミだったな…俺以上に緊張してるんだな…。

そして俺は顔をあげる。

顔をあげたんだ。

それが失敗だったのか成功だったのか。
それが正しかったのか過ちだったのか。

そんなの分からない。

ただその時…。

顔をあげた瞬間に俺の運命は決まっただのかもしれない。

黒板の前には今まで見たことのない生物がいた。
あんな生物なんて見たことがない。

髪はさらさらの美しい黒髪。
小柄でシュツとした体格。
整った顔立ち。

これこそが大和撫子というべきなのだろうか…？分からない。そもそも大和撫子なんて軽い一言で片付けて良いのかすら分からない。
名字は桜井。名前は優。

俺はその存在に目を奪われた。

（かわいいって…レベルじゃねえだろ。）

一言で言えば容姿端麗。

ちゃんと言えば長く語る事になるだろう。
クラスの誰もがその存在に目を奪われた。

男子の制服を着ている事と含めて。

「え…なにあれ？」誰かが言った。
当然だろう。

突然クラスの自己紹介に男子の制服を着た美少女が出てきたら誰だ
って驚く。

なぜなんだろうか…。

桜井優。彼女は男子の制服を着ていた。その持ち前の容姿と制服が
実に不釣り合いだ…。

ざわ…ざわ…。

とクラスが騒ぎ出す。

「あーい…静かにしろー。」

高崎が注意する。だが無駄だろう…あんな謎の生物がいたら誰だっ
て騒ぐ。

（意味が分かん…。）

桜井さんは顔を真っ赤にして席へと戻っていった。あれ…？桜井さ
んで良いんだよね？桜井って訳じゃないよね？

その桜井さんは机に座るや直ぐに下を向いてしまった。実に可愛ら
しい。

「あー、んじゃ次の島村。」

次の島村という男子が立ち上がる。
その的にはやっと静かになった。

「…。」

俺は悩む。これはチャンスではないか？

この絶世の美少女、桜井優と話しをする絶好の機会なんじゃないか？

そう考えた瞬間に口が動いた。

「あんた緊張しすぎだろ。」

少し笑顔を交えながら俺は桜井優に話しかけた。

「…え？」

突然話しかけられたからか桜井優は驚いている。相変わらず顔は赤い。

「俺も緊張したけど、あんた噛みすぎじゃねえか。」我ながら口が良く動く。いつもは全然ダメなものにな。

「だ、だって…そりや緊張するじゃん。」桜井優は自己紹介の時と同じような優しい声をしていた。

「だとしてもだよ。一言発する度に噛んでたよ？」苦笑する俺。

「う…うう…。」俺の言葉を聞いた桜井優は俯いてしまった。どうやら押しに弱いらしい。

「悪い悪い。別に責めてる訳じゃないんだよ。ただ1年間よろしくな。」なんか完璧だな。こういう時に話の運び方が上手く出来るのは嬉しい。

「え…？」だが桜井優は驚いた顔をしている。ん？俺なんか変なことを言ったか？

「いや…だから1年間よろしくな。」改めて言う俺。

桜井優は何故か固まっている。

なんだ何があった。

俺、なんか呪文でも唱えたか？

スロウとかストップとか…某ファンタジーの呪文は唱えてないぞ？

「…どうかしたか？」彼女の顔を伺う俺。なんだろうか…彼女は固まったままだ。

「…よ、よろしく？よろしく？」彼女はそう呟いた。

「ああ…よろしくな。」これで何回目になるんだ。

「う…うん！よ、よろしくね！」

固まっていたかと思えば突然喋りやがった。眩しいほどの笑顔だ。ヤバイ…かなり可愛い。

そうして彼女の笑顔を見た俺は前に向き直った。

うーん可愛い…。可愛いぞ、桜井優…。

俺は一目惚れという奴をしてしまったのかも知れない。

ただ…一つ謎がある。

なんで桜井優こと彼女は男子の制服なんか着てるんだ？

あれか？腐ったミカンで有名な某ドラマでもあった奴か？

確かあれは…体は女子なんだけど心は男子ってやつだったな。

あゝ納得。

桜井優はそういう人間なのだろう。

少し残念。

心が男子ならしょうがない…いくら俺でもそんな人を狙うことはしない。

見た目が美しいからって、いくら体が女だろうと心が男なら仕方ない…。残念。

そうして俺は他の奴らの自己紹介を聞き続ける事にした。

坂本翼

桜井優との会話が終わり。
俺は黒板を見つめた。

二年前。
中学校の時だ。

俺：坂本翼は友人と呼べるものを失ってしまった。

中学の時の俺は普通の中学生だった。
今も普通なつもりだが…。

当時は毎日のように笑い、そして走り回っていた。
野球をしていた俺は輝いていたと思う。
ポジションはショート。

自分で言うのもあれだが、なかなか自信を持てる実力だったはずだ。

当時、仲が特別良かったのはセカンドの高橋。ライトの三浦の二人。

あの時は恥ずかしがって言わなかったが、親友と呼べる仲だった。

だが関係は崩れた。

初めはただの会話。馬鹿らしい話を繰り返していたら何かが高橋の心を傷付けたのだろう。

高橋は俺に殴りかかってきた。

今でも彼がなんで怒ったのかは分からない…。これから分かることはないだろう。

喧嘩をした場所は学校の廊下。

毎日のように通っていた俺の居場所。

そこで俺と高橋は喧嘩をした。

最初はただの殴りあい。

それから殴り、掴み、倒し、投げ。

三浦が手を出す暇もなかったらしい。

そうして俺は気づいた。

喧嘩が楽しく感じて来たのだ。

俺は…まるでゲームのように高橋を殴った。その時は楽しかったのだ。

だがそれも崩れる。

高橋は最後の…そう…最後の抵抗として俺を精一杯の力で押してきた。

まるで力士に突っ張りを受けたかのように…俺は押された。そして場所は階段際まで来てしまった。

廊下に階段が有るのは当然なのだが、あの時ほど階段を恨んだ事はない。

いや…実質は自らを恨むべきなのだろうが…。

押されるままに階段際まで来た俺は少しの抵抗をした。
高橋の顔目掛けてのストレートだ。

それ完璧にヒットした。

そして…それが高橋の頭を爆発させてしまった起爆剤になった。
俺の殴りを受けた高橋は発狂したかのように俺を押しした。

階段に向けて。

その時に俺は寒気を感じていた。
それは現実になる。

俺は落ちた。階段から。

高橋も落ちた。押した時に体制が崩れたのだろう。
二人まとめて落ちた俺達。

その時に俺は意識を失った…。

起きた場所は病院。

俺は頭部を打ち付けたことによる気絶。
階段から落ちた際に出来た傷。
それだけですんだ。

起きた時に一番気になったのは高橋の事だ…。俺は部屋に来ていた
母に聞いた。

高橋はどうなったのかと。

母は簡潔に答えた。
「亡くなったわ…。」

体中から血が引く感じを覚えた。
寒気がまた襲ってきた。

俺は何も答えずベッドに戻り込んだ。

何も見たくなかったからだ。

直ぐに退院した俺は家へと帰った。
そして直ぐにベッドに潜り込んだ。

何も見たくなかった…。

何も聞きたくなかった…。

ただ見たかったのは高橋の笑顔。
ただ聞きたかったのは高橋の笑い声。

全部消えてしまった。

全部消えてしまった。

残ったのは高橋への罪悪感と、自らへの殺意だけだった。

ベッドに潜っている間はただひたすら死に方だけを考えていた。
どうすれば高橋への贖罪となるのか。
どんな死に方なら贖罪となるのか。

今…思い返せばなんとアホらしい。

そのまま死んでいたら俺は最低のクズだっただろう。

高橋への罪悪感から逃げ。

死ぬ事を贖罪として罪から逃げ。

何より、俺はもっと他の人への贖罪をしていなかったのだ。

なんて最低なんだろう。

そんなことに気づいたのはそれから2週間もしてからだ。

では2週間なにをしていたのか。

それがこの昔話の議題だ。

アホな俺にはお似合いの黒歴史な訳だがお付き合い頂きたい。

坂本翼？

俺が住む街。

名前は姫山市。

姫山市は都市圏の中でもかなり発達した街である。

ビルは木のように建ち並び、車は蟻の行進のように走り回る。

田舎の人間なら憧れるような街だ。

俺はそんな街に住んでいる。

姫山市の最大の特徴は住宅街と繁華街の差だろう。

住宅街と繁華街の間には少し大きな川が流れている。住宅街と繁華街はその川に架かる橋を渡ることで行き来する。

住宅街と繁華街にはかなりの差がある。

住宅街は本当に住宅街である。

朝は通勤の人々が歩き回り。昼は主婦達の喧騒。夜は一家の団欒。

それがこの住宅街だ。

だが対して繁華街は違う。

朝は帰りの人がいたりして。昼は人々が集まり騒ぎだし。夜は眩しいくらいの光と喧騒に包まれる。

繁華街は本当に繁華街なのだ。

この川を隔てた2つの街が姫山市の最大の特徴と言って良いだろう。

そして…だ。

繁華街には当然裏の顔がある。

夜には闇があるものだ。

当時の俺達、中学生にも知られている闇が存在していた。

今回は闇のひとつ…「殴りあい」について説明したいと思う。

殴りあいとは名前のとおり殴りあって戦うことだ…。以上で説明終わり。

詳しく説明するなら殴りあい随分と昔から続くこの街の悪習…と言ったら良いだろう…。

自らの強さを証明したがる人々が集まり…そして殴りあう。

殴りあいには主に深夜行われる。

中学の奴らも調子に乗って参加するやつが居たりしたが…負けて帰るのが定めだ。

まあ…そんなこんなで、その悪習は中学の俺らにも伝わっていたの

だ。

それを布団に籠った俺は思い出した。

自らの強さを証明する。

それは戦い。

自分を今、一番…現実逃避させてくれることは間違いなく戦いだっ
た。

俺は深夜に家を出た。

自転車で10分程度だろうか。

すぐに繁華街へ到着した。

深夜の繁華街には人が多い…というのはお決まりなのだが姫山市は
違う。

人はかなり少ない…。いや、居ないに等しい。

理由は簡単だ。殴りあいが起きるからだ。戦いが始まるのだ。

だから人なんて居ない。

「本当にいないんだな…」

俺は呟いた。その声が響いたかと感じたぐらい街は静かだった。

だが静寂は崩れる。

カッン…カッン…と足音が聞こえる。

人が来たのだろう。

俺は身構えた。

こんな時間に街をうろつくやつは戦いたがりか…または何も知らない新参だけだ。

そんなこと俺にも分かる。

向こうの路地から人が出てくる。

見た目は20歳前後。髪を上手く立たせた見るからにそちらの世界の男性だ。

彼は声を発する。

「おい…お兄さん。なにしてんの」

俺は彼へ近づく。平然を装いつつ接近する…あくまで平然にだ。

「聞いてんのかよ」

彼は語調を強める。だが決して俺は止まらない。彼へ近づく。

「なんとか言えや！クソガキィ！！」

彼は近づいてきた俺へ、言葉を投げ掛けた。
と…同時に彼の右腕が後ろへ引かれる。
人間が殴る際に取りる行動だ。

俺は尚も近づく。彼との距離はだいたい5mほどか…。

彼は引いた右腕を力強く押し出す。
同時に左足を前へ踏み込ませる。
彼の本気の右ストレートだ。

俺の考え通りだった。

この深夜の繁華街の人間は多くが血の気盛んな獣どもだ。

ならそんな獣が何の抵抗もせず…そしてあからさまな挑発をしながら近づいてきた餌を見過ごすだろうか。

否、それは無いだろう。
これが俺の考え。

餌を見つけた獣ほど狭い視界を持つ生物は存在しないのだ。

だから俺は餌を投じる。
そして彼は食い付いた。

彼の右ストレートが俺を襲う。

俺はそれを左にステップして避ける。
彼の右腕が空を切る。

チャンスでしかない。

俺はその隙を見過ごさなかった。

俺は直ぐに体制を建てる。

彼の頭はから空きだった。

（ここだ）

俺の脳内に電撃が走る。

直感的に俺は彼を殴っていた…本気で。

「うぐあ！」

彼が倒れこむ。

そこに俺は追撃を入れていく。

倒れた彼に俺は馬乗りになる。

あとは簡単だ。

ひたすら殴る。殴る。殴る。殴る。

「…！」

ふと、我に還った。

何を俺はしているのだろう。

自らの手を見る。

血だ。血がついている。

「あ…ああ…あ…」

何が何なのかわからなかった…。

と…思えたら良いだろうよ。

さっき俺は彼を殴った。

さっき彼を傷つけた。

この瞬間に俺は殴りあいに興じる事になったのだ。

自分の存在を繋ぎ留めるため。

生きる意味…。

それを考えることから逃げるため。

なにより…高橋の死から逃げるため。

俺はこの夜の町に逃げ込んだ。

坂本翼？

小さい頃の話だ。

親父から喧嘩技を習った。
いや、本当にね？

親父曰く「小さい頃から護身術を覚えておくのは良いことだぞ息子よ！」

なんて言ってた気がする。

でも実際は護身術なんて物じゃない。
正しくは喧嘩殺法だ。

大きくなるまで分からなかったが、親父から習った技はどれも喧嘩技だったのだ。

相手の無力化を狙う技である。

普通、護身術というのは敵からの攻撃に対しての反撃、または抵抗の際に役立つ物である。
いかに敵からの攻撃を避けるか。
これが重要なのだ。

だが親父の護身術は違かった。

あくまで攻めの姿勢を作る。

いつでも相手を倒すことを狙う。

これが親父流の護身術だ。

親父は「これが護身術なんだ！異論は認めん！認めんぞおお！」とか言ってた。

ただ喧嘩技で片付けるのも確かにおかしい技なのだ。

あくまでこの護身術は敵からの攻撃を狙う…絶対に攻めてはいけな
いのである。

これは護身術の反撃限定に由来する。

だが反撃と言ってもただの反撃では全くない。

敵の攻撃の際の隙を狙う、そして隙を狙い攻撃を叩き込む。

これが親父流護身術。

叩き込む際は完全に立場を逆にする。

理想的なカウンター技だ。

今回あのガラの悪いお兄様に使ったのはあくまで序の口だ。

避ける↓隙を狙う↓殴る殴る殴る。

上手くいった際の流れだ。

基本的な立ち回りは…

避ける↓隙を探す↓避ける↓隙を狙う↓殴る↓避ける↓殴る

のようにあくまで一撃必殺は狙うべきではない。深入りが一番危険だ、この技は。

深入りしては反撃の技として確立できなくなる。あくまで反撃を主体とするのだ。

まあそんな感じ…ああ…説明ダルい…。

俺はガラの悪いお兄様をフルボッコした後に繁華街の中心になる駅周辺に訪れた。やはり駅前は他と比べると人が多い。

まあ大体の人間がガラの悪い人間なだけだな…。

「ああ！分かる分かる！あのハゲ親父！本当に最近調子に乗ってるよな！」

近くを通り過ぎた男が電話していた。

調子に乗るハゲ親父の話をしているらしい…。どんな人なんだろうか。

駅前の切符売り場に着いた俺は辺りを見渡す。やはり人は多くはない。

だが地味にいる。

どこへ行くのか…。

正直どこに行くとか全然考えてなかった…そこ！馬鹿とか言わない！

うーん…まずは散歩してみるか。

俺は駅前を散策する。

交番だ。

この交番は昼間はちゃんと仕事をこなしている。
だが夜にはほとんど意味を持たない。

警察もビビっているのだ。

噂では以前に警察官が喧嘩に巻き込まれたという話も聞いたことがある。

まあ本当だったら普通に逮捕されてるよな…つか警察も頑張れよ…。

歩き続ける。

また男とすれ違う。

今度は屈強なおじ様だ。

さすがにこんな男には喧嘩は売れない。つか売りたくない。

さっきのお兄様は弱そうだったから良かったが、たかが中学生が大人に勝つなんて普通はあり得ないのだ。

まあ俺は中学生だが喧嘩にはかなり自信がある。つか持たずにいられない。

あんな技を伝授されたら負ける気なんてさらさら無くなる。

それに体格も結構あるつもりだ。

この前175cmになりました。

わーすごい！わー！わー！

それに野球もやってたりスポーツにはかなり自信もある！

ふふ…どうだ！この完璧な設定！

これでイケメンだったら凄いだろ！

ちなみに顔は普通です…はい。

この前、女という生き物と2ヶ月ぶりに話した時は

「坂本ってさ中の下だよな」

「あ、顔のことね？」

って言われた。正直そんな女子を引いた。普通に考えてあまり喋らない人間相手にそんなこと言うか！普通にさ！

結構傷ついた…。

ま…女子なんて知らないもんっ！

女の子なんてもつと可愛い子が世界には沢山いるはずだもんっ！
俺…絶対に見返してやるもんっ！！

なんかキヤラ崩壊しそうなんでここらでやめておこっ…。

交番の前を通りすぎて、俺は裏道に入る。

車一台が通れるくらいの道だ。

まあ誰もいない…なんか寂しい。
と…思ってたなら誰か来た。

30mほど先だ。

暗くて気づかなかったが誰がいる。

体格はそんなに大きくない。
女性だろうか…。

一応、身構えておく…そして歩く。

だんだん近づくになるとなんとなく、見えてきた。

女だ…見た感じでは18歳ぐらいか。

一応18歳だから大丈夫だね！

何に對してかはお考え頂きたい。

相手との距離が近づくと分かったのだが…女はふらふらしてる。ふらふらだ。

顔を俯かせて、ふらふらと歩いている。

なんだ？なんか怖い。

と思った瞬間だ。

女は、ドサツッと倒れた。

「…へ？」

倒れた…うん…倒れた。

…

大丈夫ですかああ！？

坂本翼？

女が倒れた…俺の目の前で…。

ええ…なにこれ…。

と、とりあえずだ！

「あの、大丈夫ですか！？」

近づいて体を揺する。

よく見るとスタイルが良…ってそんな場合じゃない！

返事が返ってこないのだ。

も…もしかして…死んだ？
いや！まさか…！

すかさず俺は女の首もとへ手を当てる。

脈…脈が…脈は…脈…脈…。

「脈がない…」

え…マジか…え？
なにこの展開…。

これから相手見つけて喧嘩しまくろうと思った矢先にこれか…。

マジかよ…。

「はっ！まずは救急車呼ばねーと！」

ポケットから携帯を取り出す。

「あれ…そういえば救急車って何番だっけ…119？110？わかんねえ…」

こんな時に無能な自分に嫌気がさす…。

本当に無能だ…俺は…。

「仕方ねえ…片っ端から掛けるか…」

そう言った瞬間だ。

「ん…うん…う…」

「…！」

起きた！良かった生きてた…。

ってあれ？脈無かったよな…。
あれ？

「…ん？だれ…きみ…」

女が起きた最初の一言がこれだ。

「えと…まあ…さよなら…」

俺は回れ右をする。

どうやら関わらないほうが良いみたいだ。嫌な予感しかしねーんだ
よ…。

「ちょ！ちよつと待ってよ！」

どっかのイケメンの台詞を言いやがった。
一応振り返る俺。

「…なんか用か？」

こんなんで大丈夫だろう。

「えと…君が助けてくれたの？」

女は俯きがちに言った。

「いや別に助けたってもんじゃねえよ…あんたがいきなり倒れただけだ」

あれ？なんかキザったらしいな…。

「それを助けたって言うんだよ」

女は苦笑しながら言う。

「私は美咲。君は？」

自己紹介が早くないか？

つか美咲って普通に名字から言えよ…。

「坂本」

愛想悪く答える。正直逃げたい。

「下の名前は？」

「翼」

「翼くんか」

女はニコニコしてる。見た目は明らかに年上だ…つか年上だろう。服装はタイツにスカート。上はジャケットという普通の格好だ。

「翼くんは何してんの？こんな時間に」

ニコニコしながら聞かれる。

「なんだって良いだろう…」

愛想悪く答える…つか早く逃げたい。

「えー！お姉さん気になるなあ〜気になるなあ！あ〜あれか！若い
が故の遊びか！ちえっ！良いなあ〜お姉さんもあそびたいなあ！」

…んだ…コイツ…すげー馴れ馴れしい。

「翼くんさ〜お姉さんと遊ばーよ！遊ばーよ！遊ばーよー！」

なんだコイツ…酔ってるのか？

「遊ばねーよ…んじやなお姉さん」

さっさと逃げる。早く逃げる。

ろくな人間がいないな…夜には…。

「遊ばーよ！遊ばーよ！遊ばーよー！」

無視だ、無視。

早く喧嘩がしたい…負けても良いから戦いたい…。

そんなことを考えていた時だ。

ドサッ

また音がした。

振り返る。

「は…はあ…はあ…」

女が倒れていた。いや…苦しんでいたと言っべきか。

息を荒くして倒れこんでいる。

さっきが嘘のようだ。

「おい… あんた、大丈夫かよ！」
俺はすかさず駆け寄る。

嘘かと思ったがそうではないみたいだ。
本当に息が荒い。呼吸が不規則だ。

「は、はあ… ごめん… はあ… ちょっと… 疲れた… だけ… だから…」

女はそういうと立ち上がり、近くの壁に背をつく。

「疲れたってあんた… さっきあんなにピンピンしてたじゃねえか」
本当にこの差はなんなのだろう。

女は呼吸を整える。

「ごめん… ちょっと… 休む… ね」

そう言つと女は壁に倒れた。
どうやら今回は大丈夫みたいだ。

寝ている？ ようだ。

「… 一体何なんだよ」

俺も壁にもたれる。
時間が掛かることになりそうだ。

「ばさく…ん！つば…くん！」

「翼くんってば！」

はっ…と起きる。辺りはまだ暗い。

どうやら寝てたようだ。

なんか疲れてたか…俺…。

「あ…起きた起きた。おはよー翼くん」

あ…そういえばコイツが倒れたんだっとな…忘れてた。

「もー！翼くん起きないから襲っちゃうところだったよ？」

「襲うんじゃねーよ！つか襲うとか言うなよ！お前女だろうが！」

うん、我ながら寝起きでも良いツツコミだな…と感心してみる。

「よくあるじゃん、年上の女が年下の男の子襲っちゃうやつとか。あれだよあれ」

「いや…やめてください。全然嬉しくないんで…」

「えー！こんなに美人なお姉さんなのに？ムチムチボディのお姉さ

んなのに？妖艶なフェロモン漂うお姉さんのに！？」

「全部入んねーよ……」

「うわ…翼くん酷い…だから童貞なんだよ…このクソつたれヘタレ野郎」

「お姉様のほうが酷いです…つかなんで童貞って知ってたんだよ！」
そんな漫才はどうでも良い。

「えと…あれだ…あんた大丈夫なの？」
一応聞いてみる。

「え？大丈夫って？」
女が言う。

「だからあんた倒れたじゃねえか」

「あゝ倒れたねーうん」
女は苦笑しながら言った。

え？そんなもん？

「大丈夫なのかよ」

「大丈夫だよ。翼くんから精力奪つといたから」

「やめてください。つか取られてません。つか取られたくないです」
早口で言ってみた。

「良いじゃん！良いじゃん！一発やろーよ！お姉さんがあ…手取り足取り教えてあげるからさあ…」

最後のほっただけエロかったけど、一発やろーよって…おっさんみたいな…。

「ね？しょ？」

「しません」

キリッ　ってつけても良いぐらい真面目に言ってみた。
我ながら凄い抑制力だ。いや…まあ展開的に一発してみたいけど…。

いや！何を言ってる俺！

こんな何だか分かんない女としたいのか！俺は！違うだろ！

俺はもつと清纯な…。

ってよく見たらコイツ意外と綺麗だな。

いや！待て待て！緩くなんな俺！

ってよく見たらコイツ意外におっぱいデカいな…。

いや！待て待て！おっぱい見るな俺！

ってよく見たらコイツ大人って感じだな。見た目は二十歳前後だろうけど。

いや！待て待て！大人に飲み込まれるな！俺！気を確かに持て！

「なにさつきからジロジロ見てるの？」
女が聞いてくる。

「ななな何でもねーよ！」

「はーん…さてはお姉さんのフェロモンに感じちゃったか…ふっ
…私って罪な女」
うぜー。

まあ確かにちょっと感じちゃったんだが。

「んじゃ…俺は行くから」
立ち上がる。

「えー！もつと話しようよ！」
子供みたいな事言いやがる。

「なんかあんのかよ」

「愚痴」

「帰ります」

「ちょっとちょっと！待ってよ！」

くだらねえ…俺は何しに来たんだ。

一応座る。

べ、別に心配なんじゃないんだからね！

「んで…愚痴ってなんだよ」

「お！折れたね〜翼折れたね〜」

「帰ります」

「待つて待つて！ごめん謝るから！だから待つて止まってー！」

本当に終わりそうにないから聞くことにした…。俺って…。

「んで…愚痴ってなんだよ」

早く終われば良いな。

「うん」

女…美咲はニコニコしながら言った。

「私さつきレイプされたんだよね」

てへっ　　ってぐらいの苦笑。

「へえ…」

「あれ？なんか反応薄くない？」

美咲が俺の顔を覗きこむ。

「あ？反応？そんなん…」

ん？

ん？

レイプ？

「は？」

俺は固まりかけた。当たり前だろう。そんなこと初対面の人間に言われたらそうなるはずだ。

「いやだから、私さっきレイプされたの」
またニコニコ笑ってやる。

「なに言ってるの…お前…」
驚きで体が動かなくなるかと思った。

「うん…さっき歩いてたらさ、引きずり込まれたっていうか…何て言うか」

…

冗談じゃない…何を言ってるんだコイツは…何を平然としてるんだ。

「警察呼ぶぞ」

俺は機械的に携帯を取り出す。

「いいのっ！」

美咲が叫び同然の声をあげる。

「は…？なに言ってるんだ…？お前犯罪だぜ…？お前嫌だったんじゃない？」

嫌？

コイツは嫌だったのか？
なぜ笑っている…笑い？

なんだコイツは…俺の常識から飛んでいる…。繁華街の人間にはレイプ…強姦なんて日常茶飯事なのか？

笑ってすむことなのか？

「いや私…警察呼ばれるとマズイからさ…色々やってるし…」

美咲はそう言つと苦笑しつつ下を向いた。

「色々…か」

色々…その言葉には何が含まれてるのだろうか…。何があるのだろうか。

「ただの愚痴だよ愚痴…あゝ！スッキリした〜んじゃね！翼くんっ！」

お姉さん…美咲は立ち上がった。

「どこ行くんだよ」

俺は静かに問う。

「まあ自宅かな…疲れたし。翼くんも早く帰るんだよー！」

美咲はそついうと歩きだした。

コツ…コツ…と足音が遠ざかる。

愚痴ね…愚痴か…。

俺は立ち上がり走り出す。

美咲目掛けてだ。

「うおら！」

タツクル…もとい押し倒す。

「えっ！ちょ！ちよつとお！」

美咲は驚いた声を出す。

そのまま俺は美咲のジャケットを脱がしに掛かる。

「ちよつと！翼くん！何すんの！」

美咲は俺に叫ぶ。

だが俺は気にしない。

無理やりにでも脱がす。

「翼くん！翼くん！やめてっ！」

そうだ。その言葉だ。

それが聞いたかったんだ。

「嘘ついてんじゃねえぞ、テメエ！！」

俺は美咲へ叫ぶ。

「……！」

美咲は、はつとする。

「レイプされたって笑って言う人間が！嫌がる分けないだろうが！無理してんじゃねえよ！笑ってんじゃねえよ！俺のことなんか何も知らねえんだからもつと愚痴れよ！八つ当たりしろよ！お前はそれを出来るだけの代償が有るんだろ！？俺なんかに気を使っくんじゃねえ！愚痴するってんならとことん言いやがれ！この糞女ああああ！！！」

……良い終えて思った。

何してんの俺。

まだコイツがされたって分かった訳でもないのに何言っただ……馬鹿か……俺は。

だが美咲は違った。

「うう…ひぐつ…あう…ひぐつ…」
泣いてる。

え？ 俺泣かせた？

俺のせいなのか？俺のせいかな？

「あ…すまん…ごめん美咲」

とその時だ。

「よく言った翼ああ！！！！」

うつさい…あの女の声だ。

「惚れてまうがな！つか惚れたわ！お姉さん惚れた！濡れるわゝ翼
くんの説教濡れるわゝカッコイー！翼くん最高！」

…

なんだよ…本当…コイツ訳わかんねえや…全く意味が解らん。

「帰ります」

これで良いよな。

坂本翼？

あのと、美咲から愚痴られた。

連れ込まれた経緯。

未成年には困ること諸々。

普段の生活のこと。

ただ話終わった後、美咲は笑った。

その時は嬉しかった。

見ず知らずのガキに話してくれたことが…とても嬉しかったんだが。

「翼くんって彼女とかいないの？そっか翼くん童貞だもんね〜！年齢〓彼女いない歴だもんね！」

こんなことばっか言われる。

しかもついて俺に来やがった。

非常にうるさい。

「じゃあ私が翼くんの童貞食べてあげる！ウヒヒヒヒ！かわいい翼くんの童貞だぜ！美味そうだわ〜たまんねえな…興奮するわ〜考えただけで濡れるわ！」

ガハハハハハハ！

って笑う美咲。

「……」

なんか前よりおっさんになってる気が。

一番びつくりしたのはこんなにエロ……じゃない……大人っぽいのに年齢は17歳ってことだ。かなり驚いた。

見た目は大人の人って感じの美咲だ……髪の毛は綺麗な茶色。

エロい……正直言つとエロい……。

結構そそられる。

いや待てや俺！

こんなおっさん嫌だろうが！

「そうだなあ……まずは私が……ウへへへ……やっべえ……抑えられないわ……」

なんか怖い……。

おっさん怖い……。

と……だ。

そんな茶葉をしながら歩いていると。
前方50mほど先に人影が見えた。

「へ…見つけた…」

2つの人影。

街灯に照らされると少し伺える。

どうやら高校生ぐらいみたいだ。
服装がそれっぽい。

「まずは…あいつらを…」

少しテンションが上がる。

元の目的はこれだ。

戦いがしたくてウズウズしている。

俺は走り出す。

2つの人影に向かって。

まずは相手を挑発。
それからだ。

構想は練つてある。

「ウヘヘヘ…翼くんのモノはどれくらいなんだろうなあ…って…
あれ？翼くん？」

人影がこちらを向く。
仕掛けるなら今だ。

さあて 始めるとしよ…

「おい！童貞ゴラァ！」

後ろから叫び声が聞こえた。

俺はリターンする。美咲目掛けてだ。

「誰が童貞だとお！！」

一気に美咲へタックルもとい押し倒す。

「うぐえ！」

女の声かそれが…。

「デメエ邪魔すんじゃねえよ馬鹿！」

俺は美咲へ怒鳴り付ける。

「ああ…どうしよう…翼くんに犯されちゃう…でも良いわ…この美咲は翼くんの肉便器になる覚悟もあるもの！！」

なんなとんでもない事言っただ気がする。

まあスルーだ。

「ちょっと美咲！黙っててくれ！俺の本職なんだよ！」

早くしないといけないので焦る。

「本職？」

美咲が問う。

だがその時だ。

「なにしてんのお前ら」

ハッハハハハ！と笑い声。

顔をあげる。

さっきの高校生達だ。

「たくっ… タイミング悪いな…」
本当にタイミング悪い。

「お楽しみ中だったか… わりいわりい」
ニヤニヤと高校生Aが言う。

いやそういう意味じゃないんだが。

美咲はポカンとしてる。
こういう時は黙ってくれるんだな。

「へえ… 綺麗な人じゃん」
と高校生B。

「一緒にホテルでも行こうぜ！」
また爆笑する高校生。

正直うざい。

「えと… 翼くん？ 知り合い？」
苦笑しつつ問う美咲。

「馬鹿か…こんな奴らとなんか知り合いたくもねえよ」
良い挑発になっただろうか。

「ああ？何言ってるんのお前」
明らかにイラッと来たらしい高校生B。

「だからデメエらみたいなクズとなんか顔も会わせたくないってことだよ」

と言い切った瞬間。

高校生Bの右腕が飛んでくる。

やはり高校生なんてこんなもんだ。
たいしたことない。
すぐに挑発に乗る。

一番やりやすい相手だ。

俺は高校生Bの殴りを左にステップして避ける。
相手の隙が出来たが今やるべきじゃない。

「美咲！離れてろ！」
美咲へ叫ぶ。我ながら臭いセリフだ。

「調子乗んなよクズがあ！！」
激昂する高校生B。

高校生AはBの後ろで待機。

どちらも美咲には目もくれない。

「んだよ…気持ち悪いサルの声なんか聞きたくねえんだよ…失せろよ!!」

この挑発が一番大事だ。

「死ねやゴラァ!!」

思いつきり俺へ殴りに来るB。

一番理想的な流れだ。

俺は再びそれを避ける。

目標は高校生Aだ。

自分が狙われている事に今さら気づいたAは構える。

だが…

「遅えよ!クズ!!」

相手のガラ空きの太股へ右足を使って蹴りつける。

「うがつ!!」

大事なのはここで蹴らない事だ。

蹴りと蹴りつけは違う。

蹴りは遠心力を利用して相手へ叩き込む。人間で一番強い物理技だ。

だが蹴りつけは相手を押す。

体制を崩すのもってこいだ。

そしてもう1つ。

蹴りつけた後に背後に体制を移しやすい！

「うおらああ！！」

やはり高校生Bが殴りきた。

予想通りだ。

Aを蹴った反動…体重移動の利用…。

そして遠心力！

この3つで十分だ！

右足で回し蹴りだ。

右ストレートをしようとしている対象は自らの左半身の無防備さを

理解していない。

人は自らの右ストレートを過信しすぎている… by坂本親父

「うおらああああ!!!!」
本気の回し蹴り。

「あがあっ!!」
入った。

そのままBは倒れ込む。

「あとは…」

振り返る。

膝立ちの高校生A。

「テメエらなんぞ相手になんねえんだよ!アホどもがあ!!」

説教してやったZE!!

思いつきりの右足での蹴りを彼の顔へ叩き込む。

「!!」

高校生Aは声もあげずに倒れた。

「ふう…」

みんな動かなくなった。

パチパチ

と拍手が聞こえた。

振り返る。

美咲が驚いた顔で拍手をしている。

「翼くんって強いんだね」

誉められた。

少し照れる…いや照れねえよ!!

「なるほど…翼くんだからキック力は半端ないってことか…」

「いや真顔で言うなよ…」

いつでもツツコミはします。

坂本翼？

今度は俺の番だろう。

そう思った俺は美咲へ今までの事を愚痴った。

高橋のこと。

喧嘩…殴りあいのこと。

自分の生きる理由のこと。

どれも美咲は聞いてくれた。

「そっか…翼くんも我慢してきたんだね…お疲れ様」

その言葉を聞いた時に俺は何故か泣いていた。何かが溢れてきた。

「翼くんも休みなよ…辛い思いしなくていいよ…私みたいに休みな？私は翼くんに助けられたんだしさ！」

彼女はまた笑った。

俺はその笑顔を見ると落ち着いた。

気づいたら俺は寝ていた。

眩しい…そう感じた。

「…ん？」

太陽が昇っている。

また路上で寝ていたみたいだ…。

キョロキョロする。

美咲がいない。

辺りを見回すと、美咲が居なかった。
帰ったのだろうか。

仕方ない…今日はまず帰るとしよう。

親に気づかれたくないし。

俺はその場を後にした。

家に着く。

どうやら誰も起きてないようだ。

俺は部屋へ戻る。そして眠りにつく。

「…」

なんかとても長い1日だった気がする。

ただの喧嘩に行ったつもりだったが色々と得たものが多かった。

美咲に救われた…気がする。

あの馬鹿野郎に。

明日も行けば美咲はいるだろうか。

いるはずだ。またふらふらしてるはずだ。そんでまたゴチャゴチャうるさいことを言ってくるはずだ。それを俺は華麗に受け流す。

思い浮かべるだけで笑いが出る。

ああ そうか… 俺は…

深夜2時。

俺は再び街へ繰り出す。

変わらず街は静かだ。

「まずは美咲を見つけないとな…」

そっだあいつが居なきゃ始まらないのだ、あいつと話をしてからが夜の始まりなのだ…。

彼女を探す。

街をひたすらに歩いた。

途中、喧嘩を売られる事もあった。

俺は全ての相手をした。
俺は全ての相手を倒した。

ひたすら歩く。

ひたすら歩く。

だが美咲はいない。

きつとあれだ、今日は来てないのだ。
こんな危ないところに毎日来るのがおかしいはずに決まっている。

そう、俺はおかしい。

もう彼女なしでは生きれない気すらしてきたのだ。

俺は心のどこかで彼女にすがっていた。

支えられていた。

たかが一度会って話したくらいで何を言っているんだ。

と笑われても良い。

俺は確信出来る。

俺も彼女も二人とも助けられたのだ。

これは俺の自意識過剰な思い違いかもしれない。
だが俺は信じたい。

俺のようなガキが美咲の助けになっていると。
本当に小さな救いでも良い。

彼女が少しでも笑っていられる時間をあげられたらそれで良い。

俺はそれだけで嬉しい。

「美咲…」

視界がごちゃごちゃしてくる。
疲れているのだろう、そう切り捨てる。

彼女はどこだ。美咲はどこだ。
俺の救いはどこだ…。

それからずっと街を歩いた。
相変わらず人はいた。
俺に対して睨みをきかす奴もいた。

だが関係ない。

今は相手なんかしてる場合じゃない。
美咲を…美咲を…。

「なあ、あれじゃね？」
耳障りな声が聞こえた、どうでもいい。

「あ？…ああ、あれだな」

再び耳障りな声が聞こえる。今度は違う人間の声だ。

「おいおい、お兄さんお兄さん！」

俺の背中へ声が投げ掛けられる。

知り合いの声では決してなかった。

俺は振りかえる。

そこには3人の男がいた。見た目は派手。頭はスカス力な印象を与えさせる人間。

俺の記憶に一人の男が浮かび上がる。

この夜の街に初めて来たときに殴った男だった。

「久っしぶり！元気にしてた？」

男はひょうひょうとした態度だ。

だがまともな人間なら、この男の真意が見え見えだろう。
コイツは俺に復讐しに来たのだ。

いや、正しくは仕返しか。

こんな人間はいつも暇なのだろう。
どうやら俺を長い間探していたらしい。

近くの仲間の顔がそう言っていた。
「なんか用か？」

俺は初めて男に話し掛ける。
用か？なんて聞く価値もないはずだが。

「おお！喋った喋った！この前は喋ってくれなかったからさ、俺嫌われているんじゃない」

バガツ！！

そう表すのが相応しい音が夜の繁華街に響く。実際は俺とコイツらの心にだけ響いたんだろうが…。

俺は彼を殴っていた。
思い切り、全力の全力だ。

殴られた…いや、飛ばされたと言っべきか―彼は後ろへぶっ飛ぶ。

「っ！！」

そのまま彼は地面に叩きつけられる。
殴られた左頬は赤くなっている。かなり効いたようだ…彼は動かず、うめき声のみを出し続ける。

「お、おい！寺田！大丈夫か！？」
寺田、と呼ばれた殴られた男―の仲間らしい若い男。
彼が寺田へ駆け寄る。

瞬時に俺は走り出した。
右手に全力を注ぐ。

寺田に近づいた男はこちらを見る。

「チッ！ただのガキじゃねえってかよ！」

男は戦闘体勢を取る。

腰を少し低くして、背を少し丸める。

例えるならばボクシングなどでよく見る体勢だろうか。

この体勢は戦闘の基本的体勢である。

避けることも、殴り掛かることも。

なんだって可能だ。

だが俺からすればどうでも良い。

今の俺にはどうでも良い。

ただ潰すだけだ。

俺の進路を邪魔するならば。

「邪魔なんだよおおお！！！」

俺の叫びが繁華街に木霊する。

一撃で仕留める。

そう心に念ずる。

こんなことしている時間でないからだ。

俺は男の近くに踏み込む。

一方、男は動かず体勢を崩さない。

おそらく俺の一撃を待っているのだろう。意味などないと知らずー

俺は左足を踏み込ませる。

そして右足を蹴り出す。

狙いは彼の脇腹。一気に叩き込む。

だが彼も甘くはない。

脇腹へ叩き込まれるはずの右足を受け止めた。

右足の蹴り自体は彼に入ったのだが、受けが完璧だった。

両腕を使い力を軽減させて脇腹で抑える。受けとしては完璧だ。

普通は間接技などに発展させたり、受け止めた足を利用して体勢を崩すなどの展開が当然だろう。

俺は自らの浅い考えに反省する事になるはずだった。

だがそれはない。

主導権は俺にある。

相手が持つ右足に力を込める。

そして地面につく左足にも力を込める。

「オラァ!!」

俺は相手を押し倒した。

「なっ!？」

相手は訳が分からない顔をしている。

当然だろう、今は自分の攻撃のはずだったのだから。

俺が彼を押し倒した方法。

それは簡単、体重をかける。

こんな簡単な答えだ。

そもそも相手の足を受け止めた時にすぐに行動に移らなかったのは自殺行為だったのだ。

いくら受けが上手かろうと意味がない。

右足が相手に持たれている状態。

これは実際かなりのピンチだ。

一気に勝負をつけられる可能性が大きい。

それはなぜか。

人間の体勢を取るのに重要な足が奪われているからだ。

これで相手に倒される可能性もある。

だが逆に言えば、相手に自分の体勢を動かさせるほどの体重を預けていることになるのだ。

そこから簡単だ。

一気に左足を弾ませてジャンプする。

方向は当然前方。

一気に相手にのし掛かる。

これで十分だ。

まあ、実際これをやるのはかなり難しいことになる。

片足で体重移動するのは意外と難しいのである。

だが親父に叩き込まれた俺には関係ない。俗に言うチートだ。俺は。

「うあつ！クソガキがよお！！」

相手が俺に叫ぶ、だがシカトだ。

コイツを叩き潰す。

押し倒してしまえば後は楽だ。
ひたすら殴れば良いだけだ。

殴つて殴つて殴つて殴つて殴つて殴つて殴つて
殴つて殴つて殴つて殴つて殴つて殴つて殴つて！！

再起不能にすれば良い。

今の俺には容易なものだ。

「ハハッ！お兄さま！ボコボコにしてー」

ドッ！

…と生々しい音がした。

同時に頭が痛くなる。

視界が更に「ごちゃごちゃ」する。

俺に感覚が遠ざかる。

覚えていること

- ・俺はなんかされた。
- ・たぶん叩かれた。
- ・んで、その後フルボッコにされた。

以上

坂本翼？

暗い…何も見えない。

痛い…ズキズキと頭が痛む。

さつきからずっとだ。

いつからだったか？

そうだ、俺は倒されたのだった。

何をされた？

何をされたのだろうか…いきなり頭から鈍い痛みが生じた。それから意識が飛んだのだ。何をされたのかは覚えてない。

んじゃあ…俺は何をしているんだ？

目の前は真っ暗。

頭の痛みだけがするだけだ。

「体」を動かそうとするが感覚が無い。

そもそも俺には体あるのだろうか。

何も分らない。

ただ頭がズキズキと痛むだけだ。

ああ…もしかして…。

俺は死んだのか？

男達に殴られてもして死んだのだろうか？それだったら笑い話だ。勢い良く出ていった末に死んでしまうなんてアホらしい。本当にバカらしい…。

こんなとこで止まりたくないのに…。

俺は探さなきゃいけないんだ…。

美咲を探さなきゃいけないんだ…。

それなのに俺はぶっ殺されたのか。

本当にバカ野郎だ…俺は。

結局一人では何も出来てなかったんだ。俺一人では人に傷をつける程度のことしか出来ないような人間だったのだ。

親に顔向け出来ねーな。

あ、もう死ぬから関係ないか…。ってもう死んでんのかな？

まあ良いや…さつさと。

「起きろや！クソガキッ！起きろってのが聞こえないのかッ！」
ドスッ！ドスッ！ドスッ！

なんかサンドバッグに殴りまくってるような音が聞こえる。

…あと、なんか声が聞こえる。

まあ良いやさつさと。

「起きろよおおおおお！…！」
ドスッ！ドスッ！…ドスッ！…

なんか腹辺りがジワジワする。

あれ？腹ってどこだ？

まあ良いやさつさと。

「いい加減にしないと犯すぞおお！」

「それは嫌ですううう……！」

反射的に声が出た。

目の前に色がつき始める。

見える。

ぼんやりとだが……視界が出来た。

なんだ死んでなかったのか。

中途半端な体だな……さつさと。

「うきやあああああ……！翼きゅんが起きたあああああああああ……！」

うつさい声をする。

誰だろう……ぼんやりして見えない……。

体は相変わらず重い。

さつきは喋れたのに口が動かない。どうやら犯されるのは、よつぽど嫌だったみたいだ……。

「ってなんだまだ寝てるんじゃない……寝言で拒否するとは……さすが私の王子様」

なんだろう……唐突に殴りたく……。

「もう……心配したんだからね……。路上で地面にキスなんかしてる中学生初めてみたよお姉さん」

路上にキスしてたらしい。

「ちょうど良いや…。そこまで怪我してないみたいだし、寝てるし。ここらで逃げるとしようかな…」

…逃げる？

「…本当に無茶しないで欲しいよ…お姉さんスゴい心配したし。怪我なんかしても何にもなんないんだから」

なんかさっきから話掛けて来てるけど返事出来ないのって辛いな…。なんか。

「翼くんみたいな子はこれから青春なんだから…お姉さんみたいに人生無駄にしないでよ…ね？」

…青春来ると良いんだけどな。

「本当に私嬉しかったんだ…。翼くんと話が出来て、一緒に笑ってくれる人がいてさ…」

そりゃ、どういたしまして。

「私が家に帰っても話してくれるのは弟ぐらいなんだよね…まああの子は真面目に育ってほしいから話なんかしないようにしてるんだけどさ…」

…

「だから笑って話すのなんか翼くんだけなんだよ？この幸せ者！うりゃうりゃ！」

つつかれた、だが体が動かない…何も仕返しが出来ない…。

「…たった少しの時間だったけど幸せだったよ。これ以上ない幸せだった。もう他には何も要らないよ…。だからさ…」

動かない…動いて欲しいのに体が動かない…動いてくれない。

「さよなら…だね？」

動けよ…体！動けよッ！

「おっと！理由は聞いちゃダメだよ？女性に深追いは禁止なのだ！」

…なんで動かないんだ…声すら出てくれない…。どうすれば…。

「…翼くんはさ。責任を感じてるんだったよね？」

…

「なにしてんのさ翼くん。そんなの違うよ…そんな事考えるんじゃないや違うでしょ」

…

「友達の死が悲しいのは翼くんだけじゃないんだよ？なのに翼くんは謝ってもいないんでしょ？それじゃ駄目だよ…。責任感じてるんだったら謝るのは当然だよ？」

「でも今するべきなのは謝ることじゃないよ…喧嘩することじゃない」

「翼くんは学校に行くべきだよ」

その瞬間、俺に電撃が走った。

学校？どうしてそんな怖い所に行かなきゃいけないんだ？
今の俺には分かる。

あそこは処刑場だ…。

友達を殺した坂本翼の処刑場なのだ。

きっと俺は裁かれる。

それがとてつもなく怖い。

だから俺は学校が怖いんだ…。

行きたくないんだ…。

「学校に行かなきゃ駄目だよ…翼くん。行つて頑張つてきな？」

嫌だ…。

「逃げてばっかじゃ駄目なんだよ…。そんなじゃ私みたいに人生台無しにしちゃうんだよ？私みたいに学校から逃げたら」

「私は学校には行つてない…って言うか辞めたんだけどね。今じゃ後悔してるけどさ、少し辛かっただけで…逃げちゃったんだよ学校から」

「だから翼くんは逃げないでほしい」

逃げない…？

「だつてさ…」

学校から逃げない？

「翼くんは私の恩人だからさ」

台無しにしちゃいけない？

「だからそんな大切な恩人には幸せになってほしいからさ」

俺に出来るのか？

「そのお…大切な人には幸せになってほしいからさ…だから、逃げないでよ翼くん」

俺にはそれが出来るのか？

「私さ…今日気付いたら翼くんのこと探してたんだ。会いたかったんだ…」

俺も会いたかった。

「そして会えた。こうしてまた話せた。まあ一方的だけどさ」

大丈夫だ、聞こえてるから。

「ここで…さよならになるけどさ」

さよならになるけど…。

「私…翼くんに助けられたこと忘れないからね…？」

俺も助けられたこと忘れない。

「大好きだから忘れないからね…」

俺も大好きだから忘れない。

「さよなら…私の恩人。そして…また会えた大好きな人」

ぼんやりした視界の中の肌色の物体が俺の顔に近付いてくる。

なんだか良く分からない。

ただ…凄いい心が落ち着いた。

視界が大好きな肌色に包まれた…。

その瞬間、視界が暗くなる。

良く分からないけど悲しい。

大切なものが離れる気がした。

そしてまた意識は途切れた。

美咲

寝ている翼くんにキスした。

我ながら興奮してしまった…ああ恥ずかし恥ずかし。

「じゃあね翼くん」

また別れを告げる。

いい加減離れたほうが良いんだろう。

翼くんが起きたら離れられなくなってしまう…ずっと翼くんにすがってしまっただろうからだ。

だから私は翼くんから離れる。

もう一人で生きて見せる。

きつと翼くんも頑張つて学校に行ってくれるはずだろう。まあ寝てたけどさ…心には届いたはずだ…たぶん。

「あ…そうだ」

唐突に思い出すことがあった。

「私の知り合いにスゴい可愛い子がいるんだけどさ。翼くんはその子のことを幸せにしてあげて欲しいんだよね…。私じゃどうしようもないからさ」

翼くんから返事はない。相変わらず寝たままだ。

「え？誰か教えろって？そんなの自分で探してよー！翼くんなら出来るぜ！」

そう言っただ後、私はそこから立ち去る。

「世界中の女の子、全員を翼くんの彼女にしちゃえばいい話だよ！頑張れー！」

何も答えない翼くんに言う。

そっだ、きっと彼ならあの子を幸せに出来るはずだ。そう勝手に確信する。

もし翼くんが世界中の女の子全員と付き合ったらさ…。

「私達…また会えるよね？」

美咲（後書き）

昔話が長すぎてしまいましたね（笑）
止まらなくなっていました（＾人＾；）

サクライユウ

「……」

ボーッとしていたみたいだ。

二年前のことを思い出してしまった。

今思い返すと……あの一週間で俺の人生の道筋が決まったのかもしれない……。

お兄様達にフルボッコにされて気絶していた俺。

目が覚めたときには近くのビルの壁にもたれていた。

お兄様達がフルボッコにした俺をわざわざ壁に預けてくれるとは思えなかった。

誰かが俺を介抱してくれたのだろう。

それが誰なのかは分からない。

ただ、俺は気絶している間に夢を見た。

美咲が俺に話し掛けてくれる夢だ。

彼女は夢の中でも笑って、俺に話し掛けてくれた。そして助言してくれた。

あの時の美咲の言葉が無かったら俺は学校にまた通うことは無かっただろう。

再び学校に通いだした当時は予想通りの空気だった。

誰もが俺に対して心ない視線を送る。

誰もが俺を疎外する。

俺の居場所は全く無かった。
死ぬほど辛かった。

ただ疎外されるなら良い。
だが違った。

誰もが俺に視線で伝える言葉があった。

「何故お前が居るのだ」

「何故お前が来ているのだ」

「何故お前が生きているのだ」

辛かった。

彼らは俺の存在を認めてはくれなかった。皆が俺を疎外する。
教師もそうだ。

表面では俺を支えている気なのだろう。
だが俺に対しての不信感は明らかだった。
学校。

そこには俺の居場所は無かったのだ。

逃げたかった。

だがそれは出来ない。
約束したからだ。

美咲に約束したからだ。

逃げない。諦めない。自分を元に戻すため努力する。

そう…頑張るって誓ったから。

俺は学校に立ち向かった。

その後はずっとそうだった。

卒業するまで俺の居場所なく、誰も俺に話し掛けない。
だが俺は通い続けた。頑張るって誓ったから。

そうして二年たつ。

今は高校生。

俺に対しての奇異な視線は無くなった。

0からのスタートになったのだ。

そうして俺にチャンスが訪れた。

もう一つの約束。

誰かを幸せにする。

それが誰なのかは分からない。

どこにいるか分からない。

もしかしたらクラスメートかもしれない。もしかしたら近所のおばちゃんかもしれない。もしかしたら…。

誰かは分からない。

でも俺は約束したのだ。

誰かを幸せにすると。

だから俺は女性を狙う。

約束のために。

まあ私欲のほうがあるけどさ。

「あーい、んじゃ今日はこれで終わり」

我がクラスの担任が話を終える。

相も変わらずやる気の無さそうな顔をしている。

一年間、意外と楽に過ごせるかも知れない…この担任なら。

キンコンカンコン…とチャイムになる。

周りの人達はそれぞれ帰る準備を始めていたり、さっそく帰ったり、話をしたり。

昔の学校での雰囲気と一緒にだった。どこかにぎやかで騒がしい。

「ふう…」

初日に何ごとも無かったことがある意味嬉しくかったが、少し拍子抜けだ。

まあ、これから少しずつ始めていければ良いのだろう。

心のなかで念じる。

俺は配られたプリントなどをバッグへ入れる。バッグは中学校から変えていない。

まだ全然綺麗だ…使ってないわけでもあるのだけれど…。

プリントをバッグに入れ込み終わり、バッグを背負う。

ただ紙が何枚が増えただけのバッグは重量は全く変わらない。

ただ心なしに重い気がする。

一緒に帰る人もいないので早足でクラスを後にする。

廊下は帰る人達でこった返している。

「めんどくせえ…」

どうも人が多いのは苦手だ…。

ぶつかったりすると、謝る前にその人が居なくなってしまうって困った時があった。

どうも、人にぶつかるって喧嘩ふっかけられそうで怖いのだ…。まあ負ける気はさらさら無いけどな。

仕方ないので回れ右してクラスへ戻る。

先ほどよりは人は明らかに少ない。

俺は自分の机に座る。

これからこの席にお世話になるのだ…大切に使おうと思う。きつと机の神様みたいな美少女が出てきてくれるはずだ！

…って下らん下らん。

雑念はいらんいらん。

窓の外には町と青い空。

普通な風景だ。

…やっぱり普通が一番だよな。

なんだってそうだよ…。背とか高過ぎるとなんか嫌だろうし。低すぎるのも嫌だろうし。

普通が一番！

それに限るね、本当にさ。

さあて、そろそろ良い頃合いだろう。

俺は立ち上がり廊下に出る。

予想通り人はかなり少ない。

意外とみんな素直に帰るものみたいだ。

漫画とかなら…放課後のクラスで青春なイベントがあるってのに…。

って今日は学校初日だったな当然か。

俺は人が少なくなった廊下を歩く。

カツ…カツ…カツ…。

俺の足音がよく聞こえる。

後は話し声が少々…。

と想像していたら階段のほうから足音が聞こえてくる。

タンツ…タンツ…タンツ…！

徐々に音は大きくなる。

誰かが階段を上がってきているのだろう。

サクライユウ（後書き）

最近忙しかったり（笑）

サクライユウ？

「坂本くんじゃん何してんの？ちなみにこちらは帰ろうとしてる途中だよ坂本くんも帰るんだよね？帰り道もしかして一緒？もしかして家近かったり？もしかしてそれって運命なんじゃない？坂本との友情の始まりを告げる運命の始まりなんじゃないの？うわ、すごい！！」

桜井優が現れたっ！！

……。

なんか突然言われたよ…。

いやさ…あれだよ…。

心の準備ってやつかな？

突然さ…こんな長文を投げ掛けられて、尚且つ勝手に一緒に帰るよう決められて友情の始まりを告げられたらねえ…。

「ひ、ひい…」

怖いよおおお！

この人怖いよママー！！

「はあ…はあ…坂本、くん…」
なんだよ。

しかも疲れてんじゃねえかよ！

わざわざ疲れるような事言っんじゃねえよ…ちょっとビビっただろうがよ…。

はっ！

ビビってないビビってない！

「ぜえ…ぜえ…さあ、かも…とお…」

うわ、なんだよ！死にそうだよコイツ！

ブツ飛んでるよ…大気圏突破してブツ飛んでるよ…怖いよ…。

はっ！

怖くない、怖くない！

なんか埒が空かないから話しかけてみることにする…うわあ、めんどそう。

相変わらずこの子を見た目は可愛い。

さっきは訳分かんなかったけど。

見た目だけは凄い完璧だ…鉄壁の完璧さだ…うん凄い。

まあ制服が男子用を除いてな。

「えと…桜井だよな…？」謙虚そうに振る舞う俺。

「ぜえ…うんっ…桜井…だ…よ…」

「え？なに？死ぬのお前？自己紹介した瞬間に死んだ人間ってお前が人類初じゃねえの？ってそれはないか…」

相変わらず桜井は…ぜえぜえモード。

階段から上がって来たコイツはずっとぜえぜえモード。
体力的問題なのだろうか？

「ふう…ゴメンね…疲れちゃってさ」

「いや階段で疲れんなよ…人生の階段はまだ長いんだぞ…ってなに言ってるんだ！」

「あはははは」

「か、感情の無さそうな笑いは止める！傷つくだろうがぁ！」

「んじゃ、あつはははは」

「んじゃ、じゃねえよ！変わってねーよ！小さい「っ」が入っただけじゃねーか！やめてくださいマジで傷つくからさ」

…はっ！

俺は何をしてるんだ！

まさかの苦手な漫談に挑戦してしまったではないか…。

俺の得意分野は自問自答なのに…。

むー大変だなコミュニケーション。

「まあね…」

桜井が口を紡ぐ。

「…その…坂本くんと一緒に…帰りたいなって…思ったからさ…」

…。

は？

何を顔を赤くして言ってるんだコイツ。

は？

かかか、可愛いじゃねえか。
っ、っか可愛いじゃねえか。

か、可愛いじゃねえか。

「あの…？聞いているかな坂本くん？」いや待て待て！
コイツは体は女だが、心は男のオナベさんのはずじゃないか！
惚れちゃダメだ！惚れちゃダメだ！惚れちゃダメだ！

「ゴメン…やっぱり迷惑だよ…ね？」

「んぐひいいいいいい！！！」
耐えきれなくなった。

「いやいやいや！
待ってくださいよ先輩！」

なんだよこのテンプレ展開は！

男にはテンプレ展開が一番キツいんだよ！怖いんだよ！ちくしょう！

「あの坂本…くん？」

「ハ―イ！どうしたんだい？」
なんかアメリカンに返してみた。

「えと…で、やっぱりダメかな？」

「いいえ！全然大丈夫です予定ガラガラですから暇ですから！だから帰ろう！お家へ帰ろう！ハッハー！」

…。

なんか自分が痛くなってきた

「え…ホントに？」

なんかビツクリした感じの桜井。

「あ？だから大丈夫だって」内心では感動を抑えきれない俺。もうさ…なんか性別とか関係ないよな…。恋愛は魂で感じるものだけ！

「…じゃ、じゃあ帰ろう！一緒に帰ろう！お家へ帰ろう！！」

「ほら坂本くんも一緒に！」

なんか参加を強要される俺。

「お家へ帰ろー！！」

テンション高いね桜井。

「か、帰ろー」

一応、やってみました。周りの視線なんて知りません。今が楽しければそれでいいんですよ。

しかし…ねえ。

「ふんふーん」

鼻歌まで歌っちゃう桜井優。

どんだけ嬉しがってくれてんだよ…。

やべえ…泣けてきたよ…もうダメだよ涙腺崩壊寸前だよ感動巨編だよ。

にしても…友達すらいなかった中学時代と比べたら今の俺って幸せだなあ。

いくら相手がオナベさんでも友達が出来るって素晴らしいことだよな。

そうして階段を降りる俺。

隣には笑顔で俺に話かけてくれる桜井。
こうして俺の一年は始まるのだろう。
なんかここなら頑張れそうな気がする。

そう思った4月の昼間でした。

「ところで坂本くん」

「ん？　どうかしたか？」

「ズボンのチャック空いてるよ？」

「……………」

あ、やっぱり前言撤回です。

僕の青春は遠くにあるみたいです。

サクライユウ？（後書き）

どうにも忙しい昨今。

私はひっそり更新していけたら良いと思います。

良いお年を。

サクライユウ？

「そしたらさ、その子いきなり暴れ始めちゃって！ 私の高野豆腐返せええ！ って言われちゃってさ！ 笑っちゃったよ」

まあさつきからこんな話が続いてます。

学校から出た俺達。

先ほど桜井が言ってたように、桜井も俺と同じ徒歩通学組の一人です。

遠目に見たら一緒に帰ろうとしてる男子達ですが近寄って見てみれば…。

あら不思議！ 男装女子でした！。

みたいなオチがあります。

さつきから笑顔全快で俺に話してくれる桜井。

なんで俺に近づいて来れたのだろう。

彼女… もとい彼に俺は面識は無い。

でも彼は俺に話しかけてくれる。

なぜなのだろうか。「謎」はある。

だが彼… もとい彼女の笑顔に俺はそんなものなど忘れさせられてしまう。

辺りには車の通る車道。人々が歩く雑踏。空は明るく、青く光る春晴れ。

絶好の青春日和ではないか…。

今の俺は幸福である。

「なあ、桜井って家どの辺？」
突如開かれる我が口。

「え…清水丘辺りだよ？」

清水丘。

まあ、今歩いてるここも清水丘なんだけどね…。彼女…もとい彼が言いたいのは清水丘辺りの清水丘のことだろう。
分かりやすく言うなら、東京都の東京区みたいな感じ？ まあ東京区なんて無いけどあくまでも比喩です。

「んじゃ対して遠くないみたいだな」
ちなみに俺ん家はたぶん桜井の家から半径1キロぐらいにあります。

「そつえば中学校は坂本くんどこ？」
突然の桜井の質問。俺には一番辛い質問。一番避けたい質問。悲しい質問。

このたつたの一言に俺がどれだけの思いを込めているのか…を桜井には絶対に知られてはならない。

中学時代は俺の黒歴史なのだから。

「俺は清水丘第二中だよ」
一応ホントのところを言っておく。嘘は言いたくない…。

「へえ、こっちは第一中だよ」
「なんだ、そうなのか」

どうやら俺のことは知られてないようだ。まず一安心。

「……………」

「……………ん？」

突然黙ってしまふ桜井。ネタ切れだろうか…俺が話を振ったほうが良いのだろうか？

だがその刹那…空気を変えるものがあつたことを俺は理解していない。

「…あのさ」

突然、神妙な顔になる桜井。

その表情に潜んでいる思いは俺には分からない。分かることが出来ない。

人は脳で考えながら心でも考えることが可能らしい。

こいつはまさにそれなのだろう。

脳で俺との会話を考えつつ、心の底では考え事をしていたのだろう。何か心で考えるような事を。

「…坂本くんは、僕のこと見て…不思議に思わないの？」

そんな言葉。

桜井の口から出た言葉。

こいつはこの言葉を心に潜ませていたのだろう。

「不思議…ねえ」

不思議か…。

不思議じゃないわけが無いだろうに。その姿を見て不思議がらない人間がいるはずないだろうに。

では何故こいつはそんな事を聞いてきたのか…という疑問にたどり着く。

俺の憶測での答えは決まってる。

おそらく桜井は恐れているのだろう。

自分自身が招いてしまう失敗、事故に対して。

「不思議に決まってるんだろ」

俺は平坦に答える。

「はは…だね。こんな外見じゃ不思議だね、やっぱり…」

対した桜井は先ほどの快活さが嘘のような返し…まさに嘘のような。

「僕さ…」

あれ…？

そういえばなんでコイツ…。

「小さい時からいじめられてたんだ…」

桜井は語気を潜めて俺に語る。

「見た目がこんなだしさ…しかも僕はあんまり主張するのが得意じゃないし…。まあ一言で言うなら、完璧ないじめられっ子だね」

桜井の表情は語ることに暗く落ちて行く。先ほどが嘘のように…。

いや…正しく言えば嘘なのだろう。

あのコイツは虚構なのだろう…。

新しく出来た友達と仲良く話すために作られた虚構の姿。

明るく快活な姿は虚構なのだろう。

「だから小さい時から友達なんて全く出来なくて…」
「もう良いよ」

咄嗟に口が動いた。

これ以上こいつの可哀想な過去など聞いていたくなかった。

「もう良い…そんな話いらねえよ」

「ははは…だ、だよ…ごめん、僕…下らないこと言ったよね…」
そして桜井は俯いた。

過去の話などして欲しくない。

人には悲しい過去など付き物だ。

俺にだって汚い過去がある。

俺はそんな過去のことを話したくなどない…いや正しくは聞いて欲しくない。

過去の枷で今の自分を苦しませたくないからだ。

だから…。

「いらねえよ桜井…。昔話なんていらねえよ…いらねえよ」

「…え？」

顔をあげてくれる桜井。少し嬉しい。

「良いじゃねえか…昔の話なんてさ。俺らはさつき初めて会ったんだぜ？　ならさ、要らないじゃんか…過去なんて要らない。俺たちは新しく出会った友達なんだからさ…そんな過去の寂しい話なんか聞いて苦しむ必要なんかない」

「…」

桜井は黙って聞いてくれる。少し照れる。

「俺は…その…なんだ。別にお前がそんな格好でも気にしねえよ…
逆に大歓迎…って何言ってるんだ俺は！」

まずい口走ってしまった。

どうしよ照れる、照れる、恥ずかしい。

「…ふふ…ははっ」

突然笑い出す桜井。

やっぱりこいつの笑顔は可愛い。

「なんだよ臭いこと言うね坂本くん」

「やめて下さい恥ずかしいですっ！」

やべえ…マジで恥ずかしいぞ…。

「今日自己紹介の時に坂本くんに話しかけてもらってさ…。僕、最初びっくりしたんだよね。また馬鹿にされるのかな…って思ったら普通に話しかけてくれてさ…凄いいびかりした。嬉しかったんだ…」

そう言っただけ俺の顔を見てくる桜井。

やはり可愛い…。

オナベさんなんで恋愛対象に出来ないのがとても悲しい。

「僕が女だったなら惚れちゃうよねっ」

やめろ…笑顔でそんなこと言つな悲しくなる。

つか今から女の子の心に戻ってくれませんかね本当にさ。

「というかさ…」

「ん…なに？」

俺から桜井への一言。

「お前…女のままで良いじゃねえかよ」

この一言が言いたかった。

だつて切ないじゃねえか…体は女だし見た目はこんなに可愛いのに、心は日本男子なんて…切ないじゃねえか。

「……………」

桜井は笑顔のまま固まった。

やっぱり気に触つただろうか…。

「えと…坂本くん？」

やがて桜井の口が開いた。

「あ…いや別に本気じゃねえよ？ 世界中には自分の性別に嫌気が

差して転換する人なんて幾らでもいるしさ、別に気にしねえよ？」

気にはしないが寂しいけどな。

「えと…坂本くん。聞くよ？」

固まった笑顔の桜井優。

「うん、なんだよ」

やけに桜井の笑顔が変な気がする。

「僕の性別はなんですか？」

「あ？ そりゃ男なんだろう？」

体は女だろうけどよ。

「えと…僕が学校でプールに入っただとするじゃない？ そしたら僕は何を着ると思います？」

「は？」

なんだこの質問は。

「そりゃ海パンなんだろう？ あ…でも体が女だからスク水なのか？」

「……………」

固まる桜井。その姿は仏像が如く微笑を絶やさない顔…。

「待てやゴラアアアアアア！！！」

突然叫びだした桜井。

え…なんだ？ 怒らせちゃったか？

「なんか変なこと言ったか…？」

「変なこと…じゃないよっ！ 何言っただよ！ 僕は男だよっ！」

「何を今さら…そんなこと分かってるよ理解してますよ？」

「理解してない！分かってないっ」

顔を真っ赤にする桜井…さっきから顔が忙しいやつだなコイツ。

「んじゃ何なんだよ説明してくれよ」

ちよつと開き直った風に言ってみた。

「良いよ…説明してあげるよ…」

桜井先生の授業が始まった。

サクライユウ？

どつ……。

下半身に走る痛みと共に、効果音。

激痛は波のように畳み掛けてきて、俺の全身を走り出す

「いうッ！」

形容し難い声が、俺の口から漏れる。もはや声ではないような……そんな感想を抱かせてくれる。

さすが俺だ……いつだって、感想用紙10枚は必要になる男だ、って意味分かん

痛みの発信源は体の中心より、やや下。

男の大事な財産。

金の玉である。

「がヘツがはッ……」

自分でも、一体何を言っているのか分からない。

ただただ漏れる苦痛の音。

視界がぼやけてくる。

もう何がなんだか……。

「……ふんっ！」

目の前には一人の美少女……もとい美少年、サクライ。

顔を少しだけ赤らめながら、俺を睨み付けてくる。相変わらずの容姿端麗フル装備な外見、見ていて落ち着くような容姿だ。

だが、今は違う。

窮鼠猫を噛む。

と言うことわざがあるが……まさにそれなのか？ いや違う。

こいつはネズミなんかじゃない、もっと内に危険な物を秘めた……。

「おまつ……お前……、玉は……玉だけは、駄目でしょッ……！」

もう、体が言うことを聞かない。

力を失った体は地面に倒れ込む。

「な・に・がッ！ 玉は駄目だ？ ふっざけんな！ このホモ痴漢野郎っ！」

うつ……ずっしり来る言葉だ……。

そんな桜井の罵倒を、俺は地面に伏しながら聞いていた。

遡ると5分程度。

桜井先生の個別授業が始まった。

「問おう。僕は男か」

疑り深い目で桜井は俺を睨む……少々、怖い。

「ああ、男なんだろ？」

俺は当然の如く言葉を返す。

「うん、まあ……そうなんだけどさーっ」

うにゃー、と困ったように頭をかき回す桜井。かわいい……このまま、ずっと困らせていたいくらいだ。

愛玩動物に一つどうっすか？

って感じだな、家庭に一つ置いておくと便利ですよみたいな。

いや、待て待て。眺めるだけでは詰まらん……こう、くしゃくしゃしたくなる可愛さだ。わしわし、って感じじゃなくても………なんか。

「違うんだよっ、僕が言いたい……」

瞬間、桜井が黙る。あ、すみません……独白が長すぎましたね。

しかし、うーむ残念だ……もっと困らせたかったのだけれど。

困った女の子は可愛いものだ。

愛でたくなるよな……、いじめたくなってきた。

「……ん？ いや待てよ、もしや坂本くんは勘違いなんかしてないのか？ いや待て待て………そしたら水着はどうなるんだ」

一人言をぶつぶつと……なんだ？ やっぱり俺なんか変なこと言っ

てたのだろうか。

「あー、桜井？ よく分からんけど、そんな気にする事なのか？」
顔を伺うように問いかける。

「え？ えーっとね……勘違い、すれ違いが一番怖いんだよ、坂本くん」

うにゃー、つと言っていた顔からは一変して真面目な顔になる。

真面目な顔だつて可愛い桜井……うーん、一家に一台だよな。文明の発展の証だよ、三種の神器だよ、テレビの代わりに桜井を持ってこよう、そうすれば全ての家族の暇はなくなるはずだ。だつて見て飽きないし可愛いし、うーむ素晴らしいかな。

「もう良いよね……面倒くさいや」

「面倒くさい？」

え、俺の独白が！？

おいおい、まさか喋つてたのかよ俺。

どんだけ可愛い、連呼したと思つてんだよ気持ち悪いだけじゃねえかよ。

……よし、仕切り直そう。

つか勝手に結論付けるのは止めて欲しい……、置いてきぼりになつちまう。

「もうね……、ぶっちゃけると」

俯きながら桜井は言葉を紡いだ。

思えば綺麗な声をしている、コイツの純粹さが溢れてるような声だ。

ふと思う。

春風が少し冷たい。

ああ、そんな時期に俺らは出会った。

「お〇んちん付いてんだよ、僕」

「……………」

厳冬の到来である。

サクラユウ?

「愛した女はチ○コさん!? なぬなぬなぬなぬなぬなぬ
なぬなぬうううう!!!」

そう来たかよう！ 畜生めっ！

何を勘違いしてたんだよ俺はっ！

そうだ、少し考えれば分かる。

心が男なら髪型をあんなに女の子っぽくしない、あんなに綺麗に伸ばしておかないはずだ！

だって桜井はどこから見ても女の子なのだから……。

そうか、コイツは……素なんだ。

コイツの中で普通ってのは、この美少女スタイルなんだ。

そうだ！ 正真正銘の美少年なんだ！

「坂本……くん？　だ、大丈夫？　」　「だだだ大丈夫だだだだ」

「いや、絶好調に大丈夫じゃないじゃん、歯がガタガタしてるよ……」

⋮
⌊

あー、もう恥ずかしい……。

俺は男に可愛い可愛いと、連呼していたのかあ……切ない。

「ふう……そっか、桜井は俺と同じ性欲旺盛なガキなのか……そっかそっか」

「誰がそんなこと言ったよ」

桜井が平凡な流れをつくる。

「あー、えと、なんだ……ごめん、勘違いしてた悪かったな」

桜井の顔を見るのは恥ずかしいので、近くの壁を見ながら言う。

俺と壁は友達なんだぜハハッ。

「そんなあ、気にしないでよ。元はと言えば、僕が勘違いするようない方をしたからじゃん」

そんな感じに、
 気を使ってくれるのが桜井なのだろう。
 喋りは平坦

な癖に、顔は複雑そうな顔をしてる。

ああ、そうか……俺のせいかな。

俺がまたコイツに……。

「ははは、ごめんねえ……こんな見た目だったらそう思うよね」

『笑』と書かれた仮面をしてるようだ。

満面の笑みだ、それが悔しい、自分に腹が立つてくる。

本当に……どうしてこうなんだろうか。

なぜ桜井優という生物は、こんな生物になったのだろうか。

意味が分からない……今は怒っても良かったはずだろう。

それなのに桜井は笑う、綺麗な仮面を被って踊っているのだ。本当は踊りたくないか無いくせに。

嫌な空間だ。

空は青、木々は緑、近くの家は様々な色をしている。

この道、桜井と二人で歩いている道。

さあ……何色なんだろうか、俺たち二人の色は何色なんだろうか。

ブツ壊したい……そんな衝動が起きる。

コイツを、桜井を、ブツ壊したい。

そんな顔しないで欲しい。

だって友達なんだ。

友達には壁なんか要らない、仮面なんかつけてほしくない、ありのまままで向き合って欲しい。

俺に対して不満があるなら言うって欲しい。

それが壁を壊すきっかけになるからだ。

俺は壊すよ、桜井。
こっちから壊しにかかってやる。
さあ、仲良くしようや。

って……カッコつけてみたけど、何すれば良いんだ？
あれ、何すれば良いんだろう。
分かん、ヤバい分かん。
早く動かねばマズイ！
行動を起こさなければ、壁を壊すことなんか出来ねえ！
あわわわわ……どしよ、どしよ。

「あ、坂本くんそつちなんだ。僕ん家、こつちなんだよね」
ってまさかの別れ道かよ！
どしよ、どしよ……。
なんか……こつ、小学生とかのレベルでコミュニケーションを取るべきだ。

そうだ、そういうレベルの低い基礎的な所から行こつ。
って意味が分からない。
んで、小学生のレベル……小学生のレベル……なんなんだよう！
「んじゃ、またね坂本くん」
って行つちやう！ ああ、もうどうにでもなれえ！

「おいッ！ 桜井イ！」
全力で呼ぶ。

「へ、へっ？ どしたのさあ」
全力で引いてるなオイ。
だが逃げない、もう決めた……この作戦で行くぞ。

「喰らえ桜井い！ これが俺流の自己紹介だあああああああああ
あ！……」

むによ。

柔らかい感触。

いつかの春を思い出す。

桜の木の下で、走り回ったんだ。

お花見なんか興味なかった、ただ遊びたかった。
だから俺は、他の花見客のお姉さま方のおっぱいを触りまくっていた。

そうだ、これが俺のコミュニケーションだったんだ……なんて簡単なんだ。

え？ おっぱいが無い、男はどうすんのかって？

そんなもん決まってる。

男はチ○コで語り合うもんだろっが。

そう、俺はチ○コを触っていた。

そう、俺は『桜井』のチ○コを触っていたんだ。

……あれ？ なん……か違……う。

「って、えええええええええっ!!」

おおお俺は何をしてるんだっ！

即刻、手を引く。

なんでチ○コなんか触ってんだ！？
バカか！？

ああ、バカだからか！！
納得、ガッテンガッテンガッテン！

桜井は固まってる、フリーズ。
ファミコンかよ……お前、カセット触られるとフリーズしちまうのかよ。

俺は何してるんだよ……バカバカあ。

「えと、桜井……さん？ ごめん手がすべっ——」

時が止まる。

理解する、ああ……俺死ぬのか。

走馬灯は残念ながら見えない、その代わりだが、石のように硬い桜井さんの顔なら見える。

うーん可愛いなあ、ハハッ……。

んじゃ、遺言の準備は出来た。さつさとしやがれ畜生。

あー、楽しかったのかなあ、俺の人生。

分かんないや、まあ一言。

「すみません桜井さんッ！ なんでもしますんで許しっ——」

その後、人々には一人の少年の叫び声が聞こえたらしい。
確か……アッー、って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7611o/>

翼と優のお話

2011年10月8日04時21分発行